病院プリンター一斉に犯行声明

身代金ウイルス 町の医療脅かす

四国を横切る吉野川が流れ、手延べそうめんの里として知られる徳島県西部のつるぎ町。約8千人が暮らす町の医療を支える町立半田病院がいま、未曽有の脅威にさらされている。

11月中旬。病院を訪ねると、閉じられた受付と会計窓口が目に入った。待合室には長テーブルが置かれ、「内科」「産婦人科」「小児科」などの臨時窓口が設けられていた。

いすに腰掛ける高齢の女性に、職員が話しかけた。

「おばあちゃん、お名前や住所をこの紙に書いてもらっていい？」

長く半田病院に通うという女性の個人情報を、職員が一つひとつ確認していた。紙のカルテを作り直しているという。

女性は記者に言った。

「ウイルスにやられたんだって。もう何が何だか」

「ウイルス」と言っても新型コロナではない。コンピューターウイルスだ。

10月31日午前0時半ごろ、病院内のパソコンやサーバーに仕掛けられたウイルスが発動した。ウイルスの指令で病院内にある十数台のプリンターは一斉に、英文の「犯行声明」を大量に吐き出した。

「あなた方のデータは盗まれ、そして暗号化された」「（盗まれた）データは公開されるだろう」

自らを「LockBit（ロックビット）」と名乗る、国際的サイバー犯罪集団の仕業だった。暗号化されたデータの復元と引き換えに金銭を要求する「ランサムウェア（身代金ウイルス）」攻撃を仕掛ける。いま、世界の企業や組織が規模の大小を問わず被害を受けている。

半田病院では電子カルテや会計などすべてのシステムがダウン。過去分も含めて8万5千人分の患者データが失われ、バックアップも被害を受けていた。

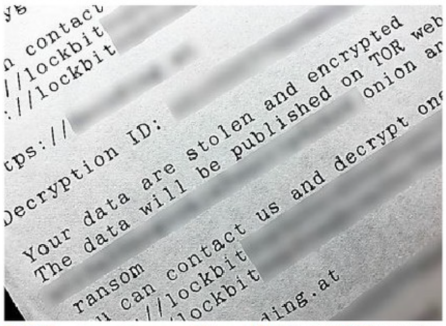
一夜が明け、病院事業管理者の須藤泰史医師はサイバーテロ対策本部を立ち上げ、非常事態を宣言した。そこで「最低限の診療を行う」方針が決まった。

救急や新規の患者の受け入れを中止し、予約患者のみ診察する。退院できる患者には退院してもらい、手術も可能な限り延期する。県西部で唯一受け入れていたお産も断るしかない。電子カルテが復活するまで、手書きでしのごう――。

地域医療を支える基幹病院は、事実上機能を停止した。目の前に広がる光景に、須藤医師は実感した。

「これは災害だ」

29面に続く



上病院のプリンターから印字された「犯行声明」の一部。「あなた方のデータは盗まれ、そして暗号化された」「（盗まれた）データは公開されるだろう」などと英語で記されていた（画像を一部修整しています）

下半田病院では電子カルテが使えず、待合室に臨時の受付窓口を設けて対応している＝15日、徳島県つるぎ町、いずれも須藤龍也撮影

◇

サイバー攻撃で大混乱に陥った病院の現場を取材した。

（編集委員・須藤龍也、斉藤智子）

掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.